

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03325

研究課題名(和文) 日本/朝鮮・中国東北からみた『満洲』の記憶と痕跡～輻輳する民族・階級・ジェンダー

研究課題名(英文) Memories and traces of Manchuria seen from Japan, Korea, Northeast China

研究代表者

金 富子 (KIM, Puja)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：40558102

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「満洲」に関し、日本人・朝鮮人の移民先である中国東北各地、日本人移民の送出元である長野県飯田市、朝鮮人移民の送出元である韓国原州へのフィールドワークを現地の協力者を得て行った。また、国際シンポジウムや公開セミナー、各種研究会を開催し、国内外の研究者と交流し研究内容を深めた。

その結果、民族人種、階級、ジェンダー・セクシュアリティが輻輳する「満洲」の記憶と痕跡について、日本人と朝鮮人の「満洲」移民の差異、農本主義と移民の関わり、「満洲」各地の性売買、文学や宗教の面で解明が進んだ。特に、中国東北の写真家李光平氏の仕事を翻訳・出版し、朝鮮人「満洲」集団移民の実態を解明した点は重要な成果だ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「満洲」「満洲国」が、中国人、日本人だけでなく、朝鮮人、欧米人などの多民族人種で構成され、それぞれの階級、ジェンダー・セクシュアリティが交差した社会だったことを批判的に考察する上で重要な意義があった。

とくに日本で解明が遅れていた「満洲国」期の朝鮮人集団移民に関する写真とオーラルヒストリーを著作や写真パネル展示で広く市民に紹介し、また「満洲国」各地の日本人・朝鮮人・中国人の性売買に関する地理的位置や数量的推移、農本主義と朝鮮・「満洲」移民との関わり、中国東北「閩島」のキリスト教と朝鮮・日本との関わり、中国人作家と「満洲国」の関係を新たに提示した点は、学術的・社会的に重要な意義をもつ。

研究成果の概要(英文)：In this study, regarding "Manchuria", we went to various parts of northeastern China, which is the destination of Japanese and Korean immigrants, Iida City, Nagano Prefecture, which is the destination of Japanese immigrants, and Wonju, South Korea, which is the destination of Korean immigrants. In addition, we held international symposiums, seminars to interact with domestic and foreign researchers and deepen their research content.

As a result, regarding the memories and traces of "Manchuria" where ethnic race, class, and gender sexuality are congested, the differences between Japanese and Korean "Manchurian" immigrants, the relationship between agricultural principles and immigrants, and Sex trading in various parts of "Manchuria", literature and religions. In particular, it is an important achievement to translate and publish the work of photographer Lee Kwang-p'yong in northeastern China to clarify the actual situation of Korean "Manchurian" group immigrants.

研究分野：ジェンダー

キーワード：中国東北 「満洲」 移動 ジェンダー 記憶 朝鮮人移民 日本人移民 セクシュアリティ

1. 研究開始当初の背景

20世紀前半の「満洲」は、中国人、朝鮮人、日本人、欧米人などが移民・居住した多民族社会であり、「満洲国」建国後は「五族協和」(日・朝・漢・満・蒙)がスローガンとして掲げられた。こうした「満洲」への移民・居住者たちが「満洲」をどのように経験し、帝国崩壊後から現在にいたるまでどのように記憶し痕跡を残してきたのかに関して、植民地朝鮮の遊廓・性売買を研究する金富子(研究代表者)が2015年5月に中国東北の延辺・琿春への予備調査旅行を行った。また、同年7月には金富子、「満洲」文学・メディアを研究する橋本雄一(研究分担者)、社会思想史を研究する中野敏男(同)の3人は、東京外国語大学の共同授業によるスタディツアー『満洲』の記憶・忘却・痕跡～中国東北地方・吉林省を訪ねて～を企画し、その一環として中国東北(長春と延吉地域)を探索した。このスタディツアーは、韓国の聖公会大学と韓信大学、中国の寧波大学と共同で行われ、現地の延辺大学の協力も得て行われたものであり、ここでは長春と延吉地域について日本の「満洲」支配の痕跡や、日本人/朝鮮人移民の生活の交錯や記憶の軌跡を辿って、その歴史の基礎的な確認が行われた。

さらに近世近代の遊廓を研究する吉田ゆり子(研究分担者)が長野県の飯田市歴史研究所の顧問研究員であり、本学出身の島崎友美(研究協力者)が同県の満蒙開拓平和記念館スタッフというつながりから、両者との連携をはかる目処がたった。ここに日本近代農業史を研究する野本京子(研究分担者)、近代中国キリスト教史を研究する倉田明子(同)、香港および中国抗日パルチザン研究をする澤田ゆかり(同)が専門の立場から参加した。大学院博士後期課程(当時)に所属した中国ジェンダー研究をする朴紅蓮(のち研究協力者)、同じく院生(当時)で朝鮮近現代史の視点から「満洲国軍」を研究する飯倉江里衣(同)が、語学力と専門を生かし参加した。

このように、複数の調査旅行および準備過程で構築された東京外国語大学を基盤とする「満洲」研究ネットワーク、日本・中国・韓国の研究者・関係者、現地の体験者・研究者との人的なネットワークが本研究の学術的背景となった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東京外国語大学に所属する異なる分野の研究者たちが、帝国日本による20世紀前半の「満洲」(「満洲国」含む。中国東北地方)支配を対象に、民族・人種、階級、ジェンダー・セクシュアリティが複雑に交差し輻輳する場として「満洲」をとらえ、その視座から「満洲」経験と現在にいたる記憶と痕跡に関して、歴史的・思想的・文化的に検証することである。

具体的には、(1)第1課題:「満洲」におけるセクシュアリティの展開(金富子・吉田ゆり子)、(2)第2課題:日本人/朝鮮人の「満洲」移民の思想と文化(野本京子・中野敏男・金富子)、(3)第3課題:中国人/欧米人の「満洲」期の社会と文化(橋本雄一・倉田明子)、(4)第4課題:ポスト冷戦期に想起される「満洲」の記憶と痕跡(中野敏男・澤田ゆかり・金富子)などの諸点について、2016年から2019年度の4年間(コロナ禍のため実際は5年間)にわたって、中国東北、日本、韓国へのフィールドワークと現地の体験者・研究者との学問的交流・対話を通じて、東アジアの歴史的社会的文化的文脈に位置づける形で学際的に明らかにしようとした。

3. 研究の方法

本研究の要諦は、東京外国語大学の各分野の研究者が先述の四つの関心(課題)に関して、民族・人種、階級、ジェンダー・セクシュアリティが輻輳する場としての「満洲」研究に学際的に取り組むことである。そのため、1)移民先である旧「満洲」=中国東北地域、および送り出した日本、韓国への現地フィールドワーク調査・聴き取り調査の実施、2)研究史の現状、各自の調査

／研究の方針・成果共有のための公開セミナーや内部研究会の開催、3)研究成果を国内外の研究者を招聘して討論・検討を行うための国際カンファレンスの開催を行うとともに、研究者・市民・学生に成果を還元するための 4)公開の国際シンポジウムや写真パネル展の開催、5)研究成果の出版、それを念頭においた成果報告書の作成、6)大学内のリレー講義と市民講座を実施した。

4. 研究成果

以上に基づく共同研究の成果は、次の4点にまとめることができる。

第1に、日本人・朝鮮人の「満洲」への移民先である中国東北（1年目：大連、延辺／2年目：長春、延辺、ハルビン／4年目：旅順・大連、瀋陽、撫順）、日本人「満洲」移民の最大の送出元である長野県（1年目・3年目：飯田市）、朝鮮人「満洲」移民の送出元である韓国（3年目：ソウル・仁川・原州）へのフィールドワークを現地の協力者とともに行い、日本人、朝鮮人、中国人、欧米人の置かれた位置の違いによる「満洲」の記憶と痕跡の違いに関して、民族人種、階級、ジェンダー・セクシュアリティという輻輳的な視点から「満洲」研究の基礎づくりをしたことである。

日本では、「満洲」移民というと日本人だけを想定しがちであり、またジェンダー・セクシュアリティの視点が欠けがちである。本研究では、中国東北、日本、韓国の3カ国の現地フィールドワークを行うことで、日本人と朝鮮人の移民政策や移民の動機・形態の違い、移民先である「満洲」での民族別の地理的位置、性売買の民族別配置、宗教の関わりを把握することができた。

まず、中国東北延辺フィールドワークでは、李光平氏（郷土歴史家）と孫春日氏（延辺大学）の案内によって日本人入植地と朝鮮人入植地を調査することによって、両者の違いを観察しただけでなく、現地で当時を知る複数の経験者にインタビューすることができた。とりわけ朝鮮人の移民先は、当時の関東軍の思惑などによって日本人農業移民に比べて危険な軍事的要所に行かされ、抗日闘争との対峙を余儀なくされたことを現地で把握できた。孫春日氏の案内により訪問した「原州村」跡はその典型であった。翌年2018年（3年目）、孫氏とともにこの「原州村」の送出元である韓国原州に行き、現地の協力者を得てフィールドワークし、原州の歴史、朝鮮人「満洲」移民の背景や現在の様子を確認できたことは大きな収穫であった。

また、中国東北の各都市の現地調査によって、「満洲国」における日本人・朝鮮人・中国人の性売買（遊廓など）の民族別地理的配置が把握できたことも大きな成果だ。具体的には、日露戦争を契機とする日本の公娼制移植によってハルビン、瀋陽、大連では、日本人・朝鮮人の性的施設は日本人居留区の近くに、中国人のそれは中国人居留区に配置されたことを確認した。大連では現地でインタビューし、日本敗戦後の旧遊廓やその後の女性たちの様子についても聞くことができた。欧米人によるキリスト教会の位置を地理的に確認し外観や内部を観覧したりした。三つの民族が交差して勃発した長春郊外の「万宝山」事件（1931年）跡地を見学した。

このように3カ国へのフィールドワークによって、「満洲」への送出元を日本だけでなく朝鮮に視点を広げ、性売買で民族の違いに目をむけ、宗教に視野を広げたことで、民族人種、階級、ジェンダー・セクシュアリティの輻輳性に関する知見を立体的に広げ、次に述べる研究成果の基礎づくりをした。その意味でも本研究は、「満洲」「満洲国」が中国人、日本人だけでなく、朝鮮人、欧米人を含む多民族人種により構成され、それぞれの階級、ジェンダー・セクシュアリティが交差した社会だったことを批判的に考察する上で重要な意義をもつことが明らかになった。

第2に、植民地期に「満洲」に渡った朝鮮人集団農業移民一世600人の写真とオーラルヒストリーについて、長年にわたり民間の立場から研究を重ねてきた中国東北延辺の写真家・李光平氏の仕事を『「満洲」に渡った朝鮮人たち—写真でたどる記憶と痕跡』を翻訳・出版（世織書房、

2019年)として出版するとともに写真パネル展を行ない、成果を広く還元したことである。

2016年度の国際シンポジウム(後述)がきっかけとなって発案され、金富子・中野敏男・橋本雄一・飯倉江里衣が関わって翻訳・編集した同書には、この4人各自の専門に関わる論考を掲載するとともに、前述した孫春日氏(延辺大学)、延辺出身の朴紅蓮も論考を寄せてもらった。また同書には、ジェンダー・セクシュアリティをテーマにする共同研究の視点を生かして、移民一世の女性や戦時性暴力に関する記録も盛り込むことができた。

さらに、写真パネルを作成して、李光平氏を招き関連行事(複数の写真パネル展、講演会・書評会など)を行った。とくに高麗博物館(新大久保)で行われた李光平写真展「植民地朝鮮から「満洲」に渡った朝鮮人移民」(2019年6月26日~7日)は大きな反響をよび、来館者が500名にのぼった。この時には、李光平氏の記念講演、さらに同書と写真パネルを作成した同上の4人および金雪梅氏(本学大学院生)が講演した連続歴史講座(2回)を行ったが、多くの聴衆により会場が満席になった。また学内でも、下記第4点目に述べる総括的な国際シンポジウムの当日(同年12月)の会場(外大)で写真パネル展示を行なった。

「満洲国」期の朝鮮人「満洲」集団農業移民一世に関する写真とオーラルヒストリーによる著作が日本に本格的に紹介されるのははじめてであり、さらに複数回の写真パネル展によって研究者・市民・学生にこの共同研究の成果を還元した点は重要な意義がある。

第3に、本研究の協力により、長野県の満蒙開拓平和記念館において李光平氏の写真を使ったパネル展示や同期間内に同記念館で孫春日氏(延辺大学)の記念講演会を開いたことで市民に成果を共有するとともに、孫氏とともに飯田市での「満洲」移民フィールドワークを行ったことで日本人と朝鮮人をつなぐ「満洲」移民への輻輳的な視点とネットワークを築いたことである。

まず、初年度(2016年)に科研メンバー全員で、日本人「満洲」移民の最大の送出先である長野県のうち、飯田市を訪れた。飯田市歴史研究所で齊藤俊江氏による研究史に関する講演、3人の移民経験者(子孫含む)の証言を聞く機会をもった。川路村資料館での資料調査と文献収集、満蒙開拓平和記念館の訪問と寺沢秀文氏(当時専務理事)の講演を聞き、面談をした。これらフィールドワークを通じて移民経験者の聞き取りや研究交流をし、その後も交流を深めてきた。

そのうえで、2018年(3年目)に同記念館スタッフ島崎友美(研究協力者)の作成による李光平先生の写真をつかったパネル展示「朝鮮人移民を知っていますか?」(2018年7月18日~8月20日)を行うとともに、同期間内に同記念館で孫春日氏(延辺大学)の記念講演会をもった。さらに飯田市歴史研究所の齊藤氏の案内により、孫春日氏とともに飯田市で「満洲」移民に関するフィールドワークを行うなかで、日本人「満洲」移民を輩出した家を訪れその経験を聞き、この地域での水力ダム工事における朝鮮人強制労働に関する研究蓄積を共有できた。

ここには二つの成果がある。まず、日本人「満洲」移民の歴史を展示する満蒙開拓平和記念館において朝鮮人「満洲」移民の写真パネル展示と講演会を行なったことで、「満洲」移民に関心をよせる一般市民に朝鮮人「満洲」移民の歴史をはじめて提供・還元したことである。次に、孫春日氏とともに飯田市での「満洲」移民フィールドワークを行なったことで、日本人と朝鮮人をつなぐ「満洲」移民への輻輳的な視点とネットワークを築いたことである。

第4に、これまでの共同研究の総括的な成果として、2019年12月に中国東北と韓国から研究者を招き、第1~4課題を網羅した国際シンポジウム「日本/朝鮮・中国東北からみた「満洲」の記憶と痕跡—輻輳する民族・階級・ジェンダー—」、および日中の若手研究者による公開フォーラム「満洲」における移民・闘争・ジェンダー」を行ない共有したこと、この報告内容とコメントをオープンアクセス可能な学内誌に掲載して広く研究者・市民・学生に提供したことである。

初年の2016年度に、中国東北延辺から孫春日氏・李光平氏をはじめ国内外から研究者を招いて、国際シンポジウム「植民地を移動した〈在満〉朝鮮人の生活と抗日～その記憶と痕跡を移民史・オーラルヒストリーでたどる～」および国際ワークショップ「〈在満〉朝鮮人研究に関する歴史記憶事業と研究交流の取り組み、今後の連携」を開催した（2016年12月）。この二つの集まりで連携関係を深めたことが、写真集出版などその後の共同研究を発展させるに大きく寄与した。2017年度（2年目）には中国文学研究者の張泉氏（元北京市社会科学院）を招いて国際カンファレンス「誰に語りかけ、どこへと動いていくのか」とワークショップを開催し、張氏の発表「『満洲国』を逃れて一地政学の視界のもとに離散する中国人作家の系譜」をテーマに中国文学の視点からみた「満洲国」のあり方を検討した（2018年1月）。

2018年度（3年目）には韓国ソウルを訪問して、聖公会大学の協力を得て権赫泰氏・趙慶喜氏たち、孫春日氏という韓国・中国東北の研究者とともに、国際ワークショップ「韓中日における『満洲』移民研究の動向と課題～『満洲国』時期を中心に」を開催した（2018年8月）。その直後の原州市へのフィールドワークでも共同踏査を行なった（前述）。また、この4年間に、国内外から多様な講師を招きこの研究テーマに関する多角的な研究蓄積を共有するための公開セミナー（年に2,3回）、フィールドワークの事前内部研究会と事後報告を兼ねた公開報告会（毎年）、書評会（随時）などを開催してきた。また、前述のように中国東北、長野県飯田市、韓国原州への現地フィールドワークにより、研究者や現地案内者とのネットワークを築いてきた。

こうして積み上げてきた国際的な共同研究の成果を全面的に活用して、2019年度（最終年度）12月に開かれた上記のシンポジウムでは、研究分担者の野本京子・倉田明子による報告、韓国から招いた李東振氏による報告に対して、中国東北から招いた孫春日氏、渡辺祐子氏、吉見義明氏・金富子がそれぞれコメントを行った。総合司会は澤田ゆかり、各テーマ別の司会は中野敏男・橋本雄一・吉田ゆり子が担当した。具体的には、①農本主義と朝鮮・『満洲』移民との関わり（野本報告）、②欧米人による中国東北「間島」地域でのキリスト教布教と朝鮮・日本の関わり（倉田報告）、③「満洲国」各都市の日本人、朝鮮人、中国人の性売買に関する地理的位置や数量的推移（李東振報告）に関して詳細な報告が行われ、コメントや会場からの質疑応答、討論によって内容を深めた点は、今後の研究の発展に資する点で重要な成果となった。また、この総括シンポジウムの報告内容とコメントは、オープンアクセス可能な学内誌『クアドランテ』22号（2020年3月）に掲載・公開したことにより、国際的な共同研究の成果を研究者・市民に広く提供・還元することができた。併せて翌日に、日中の若手研究者7人が報告を行う公開フォーラムを開催し研究と交流を深めた。本研究から朴紅蓮が司会をし、飯倉江里衣・島崎友美が報告をし、コメントは研究分担者6人と孫春日氏が行ったが、このフォーラムは延辺大学から提案をうけて開催したものであり、今後いっそうの研究交流の進展に資する成果といえる。

さらに付け加えたいのは、2020年度の東京外国語大学の学生向け正式授業としてリレー講義「植民地『満洲』の記憶と痕跡～日本・中国・朝鮮・欧米の交差の視点から」、同年の同大学開催市民向けオープンアカデミー（市民講座）「東アジアにおけるひとの移動～旧『満洲』に渡った朝鮮人移民を考える」（全6回）を通じて、学生・市民に研究成果を還元したことだ。また、横浜市で市民が行なった「知ることで未来が見える～戦争の加害パネル展」（2020年7月）にも写真パネルの一部を提供し、橋本雄一が講演を行うなど市民にその成果を還元した。最後に、本研究は孫春日氏・李光平氏、満蒙開拓平和記念館の寺沢秀文氏、飯田市歴史研究所の齊藤俊江氏の協力なしにはできなかったことを記して感謝したい。名前は記さないが、上記の報告者やパネリストを務めた方々、インタビューに応じてくれた方々、現地でお世話になった方々に感謝したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 橋本雄一	4. 巻 1巻22号
2. 論文標題 「“眼線”と“声音”はハルピンをどう体験したか 中国人作家爵青あるいは音楽団体口琴（ハーモニカ）社の作法」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『総合文化研究』東京外国語大学総合文化研究所	6. 最初と最後の頁 92,103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本雄一	4. 巻 10号
2. 論文標題 「覚醒と美のフロー、やがて抗熱のち映笑 ~フランク・ザッパのレコードを抱えて走る~」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『peria』東京外国語大学出版会	6. 最初と最後の頁 36,37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 澤田 ゆかり	4. 巻 296
2. 論文標題 「持続可能な社会保障の構築へ：中国型福祉ミックスの模索」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日中経協ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 14,17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 チョン・ミレノイ・ハヨン、金 富子翻訳・解題	4. 巻 21
2. 論文標題 「韓国における性売買の政治化と反性売買女性人権運動」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『Quadrante』東京外国語大学海外事情研究所	6. 最初と最後の頁 305,320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野本京子	4. 巻 1
2. 論文標題 「歴史研究の磁場 - 農本主義を手がかりに」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『東京外国語大学 国際日本学研究 報告 』	6. 最初と最後の頁 56,61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金 富子	4. 巻 91号
2. 論文標題 「植民地末期 = 戦時体制期朝鮮における「帝国の教化」の包摂と排除」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『民衆史研究』	6. 最初と最後の頁 35-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田ゆり子	4. 巻 14号
2. 論文標題 「伊那谷の村と人形浄瑠璃」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『飯田市歴史研究所研究年報』	6. 最初と最後の頁 149-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野敏男	4. 巻 92号
2. 論文標題 「植民地主義と戦争民主主義」(韓国語、権赫泰訳)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『黄海文化』(韓国)	6. 最初と最後の頁 247-271
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本 雄一	4. 巻 春号
2. 論文標題 「 “ Straight, No Chaser ” の道 (タオ) 」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『 pieria 』	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野本京子	4. 巻 22
2. 論文標題 「 日本の 「 満洲 」 農業移民政策の思想的系譜 - 前史としての朝鮮移民事業に注目して 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『 クアドランテ 』	6. 最初と最後の頁 9, 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 倉田明子	4. 巻 22
2. 論文標題 「 近代中国 「 間島 」 地域のキリスト教 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『 クアドランテ 』	6. 最初と最後の頁 26, 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 李東振 (金富子監訳、吉良佳奈江翻訳)	4. 巻 22
2. 論文標題 「 民族、地域、セクシュアリティ 満洲国の朝鮮人 「 性売買従事者 」 を中心に 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『 クアドランテ 』	6. 最初と最後の頁 39, 62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 橋本雄一
2. 発表標題 「断続的」植民地期の青島と東北 ～1920年代のひと、言語、メディア言語の往来～
3. 学会等名 「満洲国」文学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野本 京子
2. 発表標題 農村の「食」の変容からみた近代史 エゴ・ドキュメントに聴く
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会大会シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 倉田明子
2. 発表標題 歴史的観点からみる宗教の「中国化」と中国キリスト教会の現状（シンポジウム・コメンテーターとして）
3. 学会等名 キリスト教史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金 富子
2. 発表標題 近代日本の軍隊と植民地遊廓
3. 学会等名 遊廓社会科研総括シンポジウム「近世～近代遊廓社会の 総合的研究」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金 富子
2. 発表標題 植民地遊廓と日本の軍隊～「京城」(ソウル)を中心に～
3. 学会等名 「メディアと観光スポットにおける植民地時代、戦争・平和のイメージ」(北海道大学)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤田 ゆかり
2. 発表標題 「香港主権返還後の20年：社会1 人口移動 ～少子高齢化の中の『越境者』～」
3. 学会等名 日本現代中国学会・関西部会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 澤田 ゆかり
2. 発表標題 「返還後の香港：これまでの20年、これからの30年」
3. 学会等名 立教大学アジア地域研究所シンポジウム「香港の過去・現在・未来」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金 富子
2. 発表標題 The Mobilization of Korean Adolescents as Comfort Women: Colonialism and the Victimization of Teenage Girls
3. 学会等名 The Berkshire Conference on the History of Women 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野本京子
2. 発表標題 「賀川豊彦の農業論にみる地域・生活への視点」キイノートスピーチ
3. 学会等名 日中韩農業史学会国際大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 金 富子
2. 発表標題 朝鮮人「慰安婦」に対する日本人の感情的ナショナリズム
3. 学会等名 感情の政治学と国際関係：東アジアにおける記憶言説の競合と妥協・和解の模索（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 橋本雄一
2. 発表標題 植民地のあいだを移動する 東北～遼東半島～山東半島にかんする「文学」表象の例
3. 学会等名 「青島・烟台をめぐるドイツ・日本・中国の「文化的記憶」」研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 橋本雄一(木之内誠・平石淑子・大久保明男)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 208
3. 書名 『大連・旅順 歴史ガイドマップ』	

1. 著者名 金 富子 (金 栄)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 256
3. 書名 『植民地遊廓～日本の軍隊と朝鮮半島』	

1. 著者名 中野敏男、金富子、他16名	4. 発行年 2017年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 296
3. 書名 『「慰安婦」問題と未来への責任 日韓「合意」に抗して』	

1. 著者名 中野敏男、他17名	4. 発行年 2017年
2. 出版社 三一書房	5. 総ページ数 303
3. 書名 『ヘイトクライムと植民地主義 反差別と自己決定権のために』	

1. 著者名 KIM Puja(金 富子)(西野瑠美子・小野沢あかね)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 267
3. 書名 Denying the Comfort Women: The Japanese State's Assault on Historical Truth	

1. 著者名 澤田ゆかり (末廣昭・大泉啓一郎)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 343
3. 書名 『東アジアの社会大変動 人口センサスが語る世界』	

1. 著者名 倉田 明子 (松谷 曄介、桐藤 薫、石川 照子、渡辺 祐子)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 かんよう出版	5. 総ページ数 234
3. 書名 『はじめての中国キリスト教史』	

1. 著者名 中野 敏男 (権 赫泰・車 承棋、中野 宣子訳)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 新泉社	5. 総ページ数 329
3. 書名 『"戦後"の誕生 : 戦後日本と「朝鮮」の境界』	

1. 著者名 李 光平写真・文、金富子・中野敏男・橋本雄一・飯倉江里衣責任編集	4. 発行年 2019年
2. 出版社 世織書房	5. 総ページ数 175
3. 書名 『「満洲」に渡った朝鮮人たち : 写真でたどる記憶と痕跡』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋本 雄一 (Hashimoto Yuichi) (30305403)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	中野 敏男 (Nakano Toshio) (10198161)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603)	
研究分担者	倉田 明子 (Kurata Akiko) (20636211)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	野本 京子(沼田京子) (Nomoto Kyoko) (90208281)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603)	
研究分担者	吉田 ゆり子 (Yoshida Yuriko) (50196888)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	澤田 ゆかり (Sawada Yukari) (50313268)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	飯倉 江里衣 (Iikura Erii)		現在、神戸女子大学

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	朴 紅蓮 (Piao Honglian)		現在、東京外国語大学国際日本研究センター特任研究員
研究協力者	島崎 友美 (Shimazaki Tomomi)		現在、満蒙開拓平和記念館

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計6件

国際研究集会 国際ワークショップ「韓中日における「満洲」移民研究の動向と課題～「満洲国」時期を中心に」	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 国際カンファレンス「誰に語りかけ、どこへと動いていくのか」	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 国際ワークショップ「在満 朝鮮人研究に関する歴史記憶事業と研究交流の取り組み、今後の連携」	開催年 2016年～2016年
国際研究集会 国際シンポジウム「植民地を移動した 在満 朝鮮人の生活と抗日～その記憶と痕跡を移民史・オーラルヒストリーでたどる～」	開催年 2016年～2016年
国際研究集会 国際シンポジウム「日本／朝鮮・中国東北からみた「満洲」の記憶と痕跡 輻輳する民族・階級・ジェンダー」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 日中若手研究者公開フォーラム「満洲」における移民・闘争・ジェンダー」	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
韓国	聖公会大学東アジア研究所		